

前置詞 *in* の脱落とその影響  
*Busy (in) V-ing* の場合

阿戸 昌彦  
(Masahiko Ado)

1. はじめに

現代英語には、(1) の斜字体部に見られるように、形容詞 *busy* に動詞の *-ing* 形 (*V-ing*) が直接後続する例がある。

- (1) a. *Margery was busy writing letters.* (Quirk, et al (1985: 1230))
- b. *She was busy preparing her report.* (Huddleston and Pullum (2002, 1259))
- c. *She was busy cleaning the house.*

OED には、古くは前置詞 *in* があつたのだが、現在では省略されるようになり、*V-ing* は現在分詞との区別がつかなくなっているとあり、多くの辞書・文法書も同様の記述をしている。

- (2) Often with vbl. N.; in which construction the prep. Commonly omitted, so that the vbl. N. becomes indistinguishable from the pr. pple.  
*Busy in finding out the art of flying.* (1713) (s.v. *Busy* 1c)

この *V-ing* をめぐっては、元々は前置詞があつたのであるから動名詞である (Fukuchi (1976:119)) という分析と、現在では *in* をとらなくなって現在分詞に転換された (Poutsma (1929:903)) という分析とがなされてきた。カテゴリーがどのように転換してい

くのかという問題はありますが、「時代をさかのぼれば、多くは前置詞 *in* を伴う動名詞構文であったことから、前置詞があれば動名詞、なければ、現在分詞とわりきって考えるのがよい (江川 (1991<sup>3</sup>:361))」という考え方がよいように思われる。

また、この *V-ing* が生起している構造上の位置について、形容詞補部なのか、それとも付加部なのかという議論もなされてきた (大室 (1988)、Senfuku (2005)、De Smet (2013, forthcoming) など)。De Smet (forthcoming) は、前置詞 *in* が脱落して、現代英語では *V-ing* は形容詞の補部位置に生起していると述べている。

しかしながら、英語の変化の過程で、前置詞 *in* が脱落して *busy in V-ing* から *busy V-ing* が用いられるようになったことで、*busy (in) V-ing* という表現の使用に何か変化が生じたのかどうか、あったとすれば、どのような変化がなぜ生じたのか、という問題を扱った研究は筆者の知る限りない。わずかに、De Smet (2013, forthcoming) が、歴史的にどのように *busy V-ing* が生じてきたかを論じているだけである。

本稿では、The Corpus of Late Modern English Texts, version 3.0 (CLMET3.0)、The Corpus of Historical American Corpus (COHA)等のコーパスを用いて、*busy in V-ing* よりも *busy V-ing* のほうがより多く用いられるようになったのは後期近代英語の終わり、遅くとも 1860 年代のことであることを検証する。<sup>1</sup> そして、*in* が脱落して *busy V-ing* が生じた要因を探るとともに、その脱落によって *busy V-ing* が、*busy in V-ing* に比べて格段に多く用いられるようになってきたことに影響していることを考察する。

## 2. *Busy in V-ing* からの転換

現代英語においては *busy* が *in V-ing* を従えることはきわめてまれになっているという事実を確認することから始める。現代英語の調査資料として、The British National Corpus (BNC)、The Corpus of Contemporary American English (COCA)、Collins *Wordbanks Online* (WB) を用いた。BNC では *busy V-ing* が 505 例検出されるのに対して、*busy in V-ing* はわずかに (3) の 2 例しか検出されない。

- (3) a. They were also *busy in following* the national NHS plan to put more money into primary care services. (BNC)
- b. It has been seen how the Thatcher Governments have been *busy in turning* the taxation of wealth into a voluntary tax. (BNC)

COCA (2013/8/31 現在) からは busy V-ing が 2329 例に対して、busy in V-ing が 6 例しか検出されない。WB では busy in V-ing が 1 例も検出されない。現代英語の 3 つの大規模なコーパスにおいて、これだけの検出数の差があることから、現代英語においては、busy in V-ing は用いられることがきわめてまれな表現であるといつてよい。

次に、busy in V-ing と busy V-ing について、その頻度が歴史上どのように変化してきたのかを確認する。末松・田島 (1998) は The Modern English Collection と Public Domain Modern English Search を、福田 (2008) は Project Gutenberg をコーパスとして利用し、19 世紀の busy V-ing と busy in V-ing の頻度について調査している。<sup>2</sup> ここでは、末松・田島 (1998) の調査結果を挙げる。

(4)	1800-25	1826-50	1851-1875	1876-1900	
busy in doing	1 (100%)	2 (25%)	16 (32.7%)	12 (13.8%)	31 (21.4%)
busy doing	0 (0%)	6 (75%)	33 (67.3%)	75 (86.2%)	114 (78.6%)
	1	8	49	87	145

(末松・田島 (1998: 17))

表(4)からは 1876 年以降になると busy in V-ing に対する busy V-ing の使用割合の増加が顕著になっていることがうかがえる。福田 (2008) も、おおよそ 19 世紀半ば以降になると busy V-ing の使用が busy in V-ing を上まわるという結果を示している。<sup>3</sup>

彼らの調査は、もともと使われていた busy in V-ing の数が減少し、busy V-ing という新しい表現形式の数が増え、19 世紀半ばには数の上で busy V-ing の方が優勢になってきたということを明らかにした。しかしながら、年代毎のコーパスの規模が明らかでないため、データ数だけでは使用頻度の増減を決定することはできない。

そこで、COHA と CLMET3.0 のデータを手がかりに、busy in V-ing と busy V-ing の使用頻度の変化を概観することで、検証することにする。COHA から得られたデータによれば、トータルで busy in V-ing は 295 例が検出できた。<sup>4</sup> 表(5)をみると、1850 年代の 64 例、100 万語あたりの出現頻度 3.89 をピークに busy in V-ing は減少に転じ、1930 年以降は散発的にしか用いられていないことがわかる。

(5)

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
2	27	28	33	64	35	33	24	17	13
1.69	3.90	2.03	2.06	3.89	2.05	1.78	1.18	0.83	0.59

1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
7	6	1	2	2	0	0	0	1	0
0.31	0.23	0.04	0.08	0.08	0.00	0.00	0.00	0.04	0.00

(上段がデータ数、下段が100万語あたりの頻度)

次に、COHA での busy V-ing の使用頻度についてみる。トータルで2094例が見つかった。

(6)

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
2	3	12	23	29	49	56	43	67	110
1.69	0.43	0.87	1.43	1.76	2.87	3.02	2.12	3.25	4.98

1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
163	175	156	163	184	152	150	161	202	194
7.18	6.82	6.34	6.69	7.50	6.34	6.30	6.36	7.23	6.56

(上段がデータ数、下段が100万語あたりの頻度)

1850年代から1860年代にかけて、busy in V-ing のデータ数が64例から35例に減少したのに対して、busy V-ing は29例から49例に増加している。100万語あたりの使用頻度はbusy in V-ing が3.89から2.05に低下したのに対して、busy V-ing は1.76から2.87に上昇している。この時期に逆転していることがわかる。また、逆転した後も、busy V-ing の100万語あたりの頻度の値は上昇を続け、19世紀初頭に比べ20世紀に入ること4倍程度になり、その後ほぼ安定している。

イギリス英語の CLMET3.0 についてもほぼ同様の結果が得られる。COHA と同様の細かい時代分けでの調査には至っていないが、busy in V-ing にはトータルで 56 例が検出できた。1710-1780 年の 27 例、100 万語あたり 2.57 から、年代を経る毎に busy in V-ing の使用頻度が下がっていることがわかる。

(7) busy in V-ing

	1710-1780	1780-1850	1850-1920
データ数	27	17	12
100 万語あたり	2.57	1.50	0.95

一方、busy V-ing はトータルで 143 例であった。1710-1780 年の 6 例、100 万語あたり 0.57 から、1780-1850 年に 56 例、100 万語あたり 4.96、1850-1920 年に 81 例、100 万語あたり 6.42 となっている。検出されたデータ数、100 万語あたりの頻度ともに 10 倍以上に急激に高くなっている。

(8) busy V-ing

	1710-1780	1780-1850	1850-1920
データ数	6	56	81
100 万語あたり	0.57	4.96	6.42

CLMET3.0 の検索結果からわかるように、イギリス英語では 19 世紀前半で、既に busy V-ing が busy in V-ing を上回る頻度で用いられるようになっていた。また、20 世紀に入るころの 100 万語あたりの頻度が COHA の結果とほぼ同じ 6.42 にまで上昇していることも興味深い。

以上のことから、イギリス英語では 18 世紀末から 19 世紀前半にかけ、アメリカ英語ではやや遅れて 1850-60 年代に、busy V-ing が busy in V-ing を上回って用いられるようになる変化が起きていたことが明らかになった。さらに、busy V-ing は busy in V-ing に取って代わっただけではなく、その使用頻度を急激に高めたことがわかった。

3. 前置詞 in の脱落の過程

前節では、busy V-ing が 19 世紀半ばには busy in V-ing をデータ数・頻度の上で上回るようになっていたこと、さらに、データ数・頻度で単に逆転しただけではなく、busy V-ing は、それまでの busy in V-ing よりもずっと高い値まで、使用頻度を急速に高めていったことをみた。このことは、単に busy in V-ing から前置詞 in が脱落して busy V-ing と交替しただけではないことを示している。前置詞 in の脱落によって、急激に busy V-ing の使用頻度が高くなったのはなぜか、という疑問が生じてくる。この疑問に答えるために、そもそも、前置詞 in の脱落がどのように進んだのかを考えることから始めることにする。

前置詞 in の脱落には少なくとも 2 つの要因が関わっている。1 つには、in の音的な要因、つまり、弱化である。2 つめは前置詞 in の意味の希薄化・働きの消失という要因である。

発音が要因であることから見ていこう。CLMET3.0 に見つかる 2 つの例を挙げる。V-ing の前に “a-” があることに注意されたい。

- (9)a. You must know, Sir, as how, when bathing and drinking the waters is over, and your Honour and such-like fine folk are all busy a-dancing; we servant-people, sometimes get together to a lesserrer room, [Page 168] and have a little hop of our own. (1776, CLMET3.0)
- b. 'Then it doubtless was the Signor,' said Emily. 'O no, ma'am'selle, it could not be him, for I left him busy a-quarrelling in my lady's dressing-room!' (1794, CLMET3.0)  
(下線部は筆者による)

Google Books で調べてみると、(9)のように in ではなく ‘a’ が V-ing の前に生じた例は、18 世紀半ばから 20 世紀初頭までみられた。

- (10)a. He's busy a dispatching some sick folks, and I'll go tell him that you are here. (1751)
- b. One Sunday morning I was busy a washing the rooms, and I saw several people follow him into the chamber. (1810)
- c. And I'm sure if ever a maid is fair, It is with her arms to the elbows bare, And a little cap on her tidy hair, Busy a-making bread. (1885)

- d. Lord Bulkeley and Mr. Bayley are busy a-canvassing, but in all probability to no manner of purpose, only for sake of opposition. (1907)

busy in V-ing から busy V-ing への移行期に、V-ing の前に 'a' を持つ例があることは、進行形や go V-ing の発達を思い出させる。<sup>5</sup> Visser (1984: 1095) によれば、He is hunting. という進行形も歴史をさかのぼれば、前置詞 on をとる形式であった。

(11) He is on (in) hunting. > He is a hunting. > He is hunting.

(12)a. while the man was in betynge, I spyed a lytle purse of his hangynge (1533)

b. This Tree I was three Days a cutting down. (1719)

(小野・伊藤 (2009:123))

V-ing の前の前置詞 on (in) は弱化し a となり、やがて、a の音が脱落して現在の形式となった。

go V-ing 「～しに行く」という表現も、その発達の過程においては、V-ing の前に前置詞 on (in) の弱形 a(n) があり、それが脱落して、go V-ing の表現形式ができた、といわれている。

(13) a. I went a fishing. (1719)

b. he would go a shooting (1813)

(*ibid.*: 145)

Jespersen (*MEG*, IV, 12.2(3)) は、busy a V-ing の例は挙げていないが、進行形の be や go に後続する位置において「前置詞+V-ing」の前置詞が弱化していくのと同じで、英語の歴史的変化における大きな流れの中の1つの事象として、busy V-ing をとらえている。Busy a V-ing の例が確認できたことは、この考えが正しいものであることを示している。

'Busy'の発音/bizi/の終わりが/i/で、後続する in (/in/)と同音であることから、連結してしまうことも予測される。語尾の/n/が脱落しやすいことは、屈折接辞の語尾の水平化を考えるとあきらかである。/i/ が前の語に吸収され/n/が落ちやすいとすれば、in の脱落を早めることにつながったとも考えられる。<sup>6</sup>

V-ing の前の前置詞 on (in) が弱化して a と発音される傾向があったとしても、busy in

V-ing において、in の意味・働きの重要なものであれば、完全に脱落してしまうとは考えにくい。次に、in の意味の希薄化・働きの消失という要因を考える。

前置詞 in があっても、それが無いときの解釈と同じような解釈が可能であるとき、in の意味・働きの弱くなっているということができよう。これまでの研究では、2つの状況が取り上げられている。

前置詞 in には様々な意味があるが、busy in V-ing での意味は、“Of occupation and engagement (s.v. *OED* 11a)” 「従事して」が考えられてきたようである。‘Spend TIME’に続く in V-ing もここに用例が挙げられている。V-ing に示された行為をしていることに従事して忙しいわけであるから、そのように考えるのは自然かもしれない。しかし、本稿では、後述するように、busy in V-ing の in は、「(ある事柄) に従事して」というよりも「(ある一定の時間) の中で」という時間に関する意味合いが強かったのではないかと、いうことを提案したい。そのほうが、busy in V-ing について in が脱落しても構わないくらいその意味が軽くなるような状況があったと考えやすいからである。先行研究の中では、現代英語と歴史的変化のそれぞれにおいて1つずつ、そのような状況が示されている。

一つ目は in があっても、それが無い場合と違いがない解釈ができる場合である。大室 (1988) は、現代英語において busy が前置詞を取ることなく V-ing を取ることに對して、動的文法理論の枠組みを用いて説明を試みている。<sup>7</sup> その中で、前置詞なしに V-ing をとる述語は、busy を含め、spend TIME など時間・労力の消費に関わるものに限って、(15) の構造でありながら、(14a)に加えて、(14b)の解釈をしても、そこに意味の差を感じさせないとしている。<sup>8</sup>

(14) Masao was spending his vacation in working at the Matsumoto factory in Tokyo.

- a. 従属：マサオは、東京の松本工場で働くことに彼の休暇をついやしていた。
- b. 対等：マサオは、東京の松本工場で働きながら彼の休暇をすごしていた。

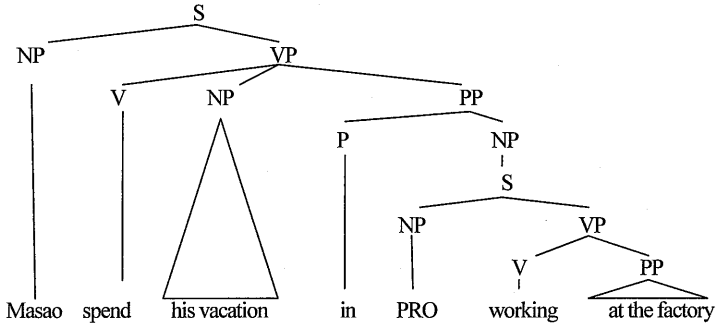
(大室 (1988:56))

(14b)の ‘in V-ing’ の解釈は、従属節でありながら、主節動詞句と対等の関係で、主節主語の状態・様態を叙述している。このとき、厳密には(14b)の解釈に對する統語構造がない状態となっている。子どもが既に習得しているであろう come V-ing のような構文で

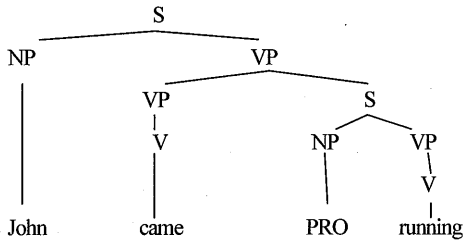


あれば、意味的にも統語的にも、主節主語を叙述する位置が確保されている。そこで、(16)の構造をモデルに、busy Ving のような例においても V-ing を主節に繰り上げ、派生的な構造を生み出すのだと主張している。

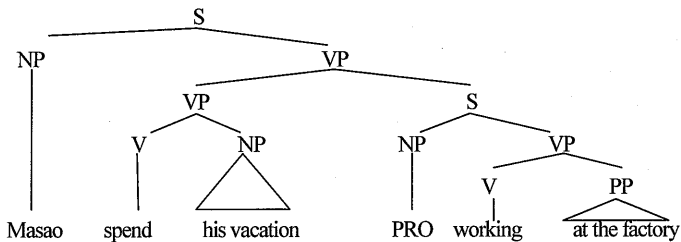
(15) Basic Structure



(16) Model



(17) Derived Structure



(大室 (1988:56f))

そして、派生構造においては「もはや、従属を示す前置詞 in は、その機能を失い（中略）、脱落することになる (p.58)」と述べている。

(14) に倣って、busy in V-ing に置き換えて考えるなら、‘in V-ing’ には元々の「～することに忙しい(14aに相当)」という本来の意味に加えて、実質意味の違いがない「～していて忙しい(14bに相当)」という解釈ができる。後者の解釈に合う構造がない状態を解消しようという力が働いて、V-ing は主節要素に繰り上がり、機能を失った in が脱落する、ということである。元々の解釈の方は、in に「従事して」の意味合いがある解釈となっている。これを「(時間)の中で」とすると、「～している(時間の)中にあって忙しい」となる。「～していて忙しい」と実質違いがないことでは変わらないかもしれないが、よりお互いが近い意味合いに感じられる。(14b) のような busy in V-ing の解釈がより発生しやすくなると考えられる。

COHA の検索結果によれば、go/come Ving が急激に頻度を高めたのは 1820~50 年代にかけてである。Busy V-ing が増えた時期とあまり差がないか、若干早いだけである。歴史的に見ても、go/come V-ing がモデルとなり得るかどうかの検証が必要である。しかしながら、重要なのは、前置詞 in の有無にかかわらず、実質的には意味の違いがない 2 通りの解釈が可能状況があるということである。前置詞 in があってもなくて同じ内容を伝えることができるのであれば、in の働きは弱いということになる。

もう一つは、busy (in) V-ing とは別の表現形式であるが、同じ解釈ができる場合である。De Smet (2013, forthcoming) は、busy V-ing の出現について、英語の歴史的变化の視点からの説明を試みている。彼は、busy V-ing は busy in V-ing からではなく、分詞構文から派生したと主張している。

(18) “the earliest instance of IPC constructions mostly arose in environments that gave occasion for reinterpretation from adverbials to complement or complement-like clauses”

(De Smet (2013: 122))

IPC(Integrated Participial Clause)は、前置詞なしに busy に続く V-ing のことを指す。彼は、(19)において、カンマの存在が無視されるならば、busy に V-ing が続く例の多くは補部節として解釈しても実質的な違いが生じないと言う。分詞構文での副詞節 V-ing は、主節主語が忙しいと話者が言っていることを正当化する情報を追加する。いっぽう、補部

(に準ずる) 節の解釈では、主節主語の行為を V-ing 節において記述された行為に絞り込むことによって、述語の意味上の範囲を制限する。どちらの解釈でも、「V-ing 節は主節主語が何をするのに忙しいかを記述する」ことになる、というのである。

(19) a. Up, and to the office betimes; and there all the morning very *busy*, *causing* papers to be entered and sorted, to put the office in order to against the Parliament. (1666, PPCEME3)

b. Thence took coach and I all alone to Hyde Park [...], and so all the evening in the Park, being a little unwilling to be seen there, and at night home, and thereto W. Pen's and sat and talked there with his wife and children a good while, he being busy in his closet, I believe *preparing* his defence in Parliament, and so home to bed.

(1668, Daily of Samuel Pepys)

c. When nature was most *busie*, the first weeke / *Swadling* the new-borne earth God seemed to like, / That she should sport her selfe sometimes, and play, / To mingle, and vary colours euery day.

d. Mr. John Collins deposed, [...] That he saw the Prisoner, who had a Black Patch upon his Nose, in the House Five or Six Minutes, very *busy*; *breaking* the Sashes and Frames of the Windows;

(1716, Proceedings of the Old bailey)

e. and by Course a new Consolidator being to be built, they were as *busie* as ever. *Bidding*, *offering*, *Procuring*, *Buying*, *Selling*, and *Jobbing* of Feathers to who bid most; and notwithstanding several late wholesome and strict Laws against all manner of Collusion, Bribery and clandestine Methods, in the Countries procuring these Features;...

(1705, CLMET)

(De Smit (2013:115f))

そして、同じ副詞的解釈を持つ in V-ing が補部 (に準ずる) 位置にあることをモデルに、V-ing が構造的に主節要素に再解釈されたと主張する。彼の提案では、分詞構文の現在分詞であった V-ing が in V-ing に代わって生起するようになったことになる。

(20) ..., nearly all IPC constructions have semantic equivalents of this kind in the form of prepositionally marked gerund constructions, and these equivalents may be thought of as

providing the model on which the reinterpretation from adverbial to IPC takes place.

(*ibid.*: 121)

彼は、分詞構文の副詞的 V-ing を主節に対する「理由」(since や as 節になるもの) のように解釈しているようなのだが、この副詞節も「～しながら」(while 節)と解釈するならば、busy in V-ing の in を「～している(時間の)中で」と解釈したときと、実質的な違いがない解釈と取りやすくなる。Busy に後続する要素が、in V-ing でなくても、( ) V-ing で十分同じ意味を表せる、ということになる。分詞構文の副詞節であるから、表記上の ‘ ; (カンマ) ’ や音声上のポーズなどをどのように処理して無視するのかは別の問題として、busy の後に隣接する in のない V-ing が、in V-ing と同じ解釈を持ちうることは、それだけ busy in V-ing の in の存在価値を弱めていることになる。

COHA を検索すると、分詞構文の V-ing が busy に後続する例が 19 世紀前半から増えていく。そして、1860 年代には 14 例と他の年代よりも多くみられるようになる。しかし、この年代ではもう既に busy V-ing への転換が進んでいるはずである。したがって、busy V-ing への転換につながるほどの頻度で、busy in V-ing との競合があったかは疑問である。ここでは、分詞構文の V-ing であっても、busy と隣接する位置で、busy in V-ing の in V-ing と意味上同じ働きをする可能性があることがわかったことにとどめることにする。

大室 (1988)、De Smet (2013, forthcoming) の両提案をこれ以上詳しく検証していくことは別の機会にゆずることにする。前置詞 in の脱落について重要なのは、in が音的に弱化していく中で、in V-ing の表現形式のままでも、分詞構文の V-ing であっても、主節主語が V-ing に示された行為を行っていて忙しいという点で、busy in V-ing と実質的な意味の違いがない解釈ができる状況がありえたことである。前置詞 in の有無にかかわらず、そのような解釈が可能であることは、in の機能が弱まっていたことを意味し、その脱落を加速させたといつてよいであろう。このことを踏まえると、おおよそ、次のようなイメージが考えられる。

(21) busy in V-ing → busy a V-ing → busy V-ing  
      { in の音的弱化  
      { in の働きの弱化

#### 4. 前置詞 in の脱落の影響

Busy in V-ing の前置詞 in が音声的にも、機能的にも弱化し、19 世紀半ばには脱落した。その後、busy V-ing の使用頻度が急速に高まっていった。また、後期近代英語 (COHA の 19 世紀ごろ、CLMET3.0) からの busy (in) V-ing の例を現代英語 (BNC、COCA、WB、さらに COHA の 20 世紀に入って以降) からの例と見比べてみると、頻度が高くなっているだけでなく、用いられている動詞がかなり変わっていることに気付く。単に、形式上 busy in V-ing と busy V-ing が入れ替わっただけではなく、前置詞 in の脱落が busy (in) V-ing の使用に与えた影響での現れであろう。本節では、busy V-ing には、busy in V-ing に生起していなかった類の動詞が現れるようになったことと、busy V-ing の使用頻度が busy in V-ing 以上に高くなったことに前置詞 in の脱落が深く関わっていることをみる。

##### 4. 1 Busy in V-ing の動詞

19 世紀前半に busy in V-ing の V-ing に生起していた動詞に比べて、現代英語で busy V-ing の V-ing に生起する動詞の種類は格段に増加している。busy in V-ing に生起していた動詞は、COHA で 195 種類、CLMET3.0 では 41 種類が確認された。それに対して、busy V-ing に生起している動詞の種類は、BNC で 430 種類、COCA で 602 種類、WB ではやや少ないものの 140 種類を確認することができた。また、COHA には 607 種類の動詞が見つかった。Busy in V-ing に高い頻度で現れる動詞、busy V-ing に高い頻度で現れる動詞はどのコーパスでもほぼ一致している。したがって、それぞれの表現形式に好んで用いられる動詞の傾向は十分につかむことができると思われる。

COHA と CLMET3.0 両方のコーパスで busy in V-ing に生起していた動詞は、大半が 1 回限りの検出で、複数回同じ動詞が用いられていることの方が少ない。COHA のデータで、より多く見つかった上位の動詞は以下の通りである。

(22) make (16), get (12), preparing (11), collect (6), bring (5), cut (4), devise (4),  
discuss (3), foment (3) (( )内の数字は検出された例の数)

頻度が高い動詞といっても、10 例以上が見つかったのは 3 つの動詞 (make, get と prepare) だけである。CLMET3.0 ではコーパスの規模にもよるかもしれないが、複数回

用いられているものがわずかしかない。

(23) make (5), prepare (5), turn (3), adjust (2), arrange (2), pack (2), write (2)

ここで興味深い事実は、「準備する」という内容を表すものが多いということである。CLMET3.0 では prepare はもっとも多く用いられた動詞であり、COHA でも3番目に多い。また、COHA の make の16例の中には make preparations が5例、get の12例中には get (...) ready, get (...) in readiness が3例、何かの準備をすることを表している表現が含まれていた。そのほかの arrange (手配する) や pack (荷を詰める)、make (何かを作る・調理する)といった動詞もまた、何かに向けて「準備をすること」に似た意味を表している。このことから推察すると、busy in V-ing という表現形式は、ある程度限られた意味(準備をすること)との親和性が高いといえる。

(24)a. The half-breeds had kindled the fire afresh, and were busy in preparing breakfast.

(1848, COHA)

b. He had but two followers with him, and they were even then busy in making preparations.

(1845, COHA)

c. We were all now very busy in getting things ready for sea.

(1849, COHA)

(25)a. Whilst my father was writing his letter of instructions, my uncle Toby and the corporal were busy in preparing everything for the attack. (1759-67, CLMET3.0)

b. At the dawn of day, he perceived that the savages were at work, that they had collected all the faggots together opposite to where the old house had stood, and were very busy in making arrangements for the attack. (1841, CLMET3.0)

「準備をすること」にも当てはまることであるが、(in) V-ing 全体の解釈については、もう1つ特徴がある。V-ing に生じている動詞によって表されている行為は、ある一定の時間をかけて何かを達成することを表している。例えば、上の(24a)では、朝食準備はそれが終わるまでいくらかの時間がかかっており、その間いろいろと作業をして時間を取られるから「忙しい」のである。「準備をすること」以外の意味で用いられている make や get の例でも、V-ing に表されている行為は、何かを達成するまでの「ある一定の時

間」にいろいろと骨折りをしていることを表している。(26a) ではプードルが座るまでの時間、(27b) では証拠を得るまでの時間、主語になっている人はそのことに時間を取られて忙しかったと解釈できる。

- (26)a. These words were addressed to a pale, quiet-looking person, who sat opposite, and was busy in making a wretched, shaved poodle sit on his hind legs in a chair, by his master's side, and hold a short clay pipe in his mouth, (1826, COHA)
- b. Bernard, Oliver, and Hutchinson were busy in getting evidence against the Patriots of New England, especially against Adams. (1855, COHA)

このことは、前置詞 in の意味を「(~している) 時間の中で・にあつて」とすることにも合っていて、不都合を生ずるものではない。

#### 4. 2 Busy V-ing の動詞

前節で busy in V-ing では「達成までのある一定の時間、何か々に従事(特に準備)する」という解釈になる動詞が多く見られたことを示した。現代英語の BNC, COCA, Collins *Wordbanks Online* と COHA から得られたデータでは、そのような解釈に当てはまらないものが急速に増えている。

上で述べたようにそれぞれの動詞の用例数も、その種類も現代英語では大きく増加している。Busy V-ing に生起している動詞で頻度の高いもの 10 位までを(27)に示す。

- (27) BNC: try (43), do (32), look (32), work (29), collect (20), get (13), make (12), put (11), organize (8), prepare (8), take (8)
- COCA: try (262), do (123), work (114), look (90), get (74), be (71), make (13), watch (48), put (42), take (39)
- WB: try (30), work (18), do (15), make (11), look (9), watch (9), get (6), play (6), talk (6) go (5), put (5)
- COHA: try (181), get (117), make (86), look (72), do (65), work (50), put (49), watch (44), take (40), be (38)

どのコーパスでも一番多く例が見つかったのは try であった。そのほか、do、work、look、put も上位に入っているが、いずれも busy in V-ing ではほとんど用いられていなかったものである。

(28)a. The Navy is busy trying to save the ship. (2002, COHA)

b. We're too busy trying to avoid the bullets. (BNC)

(29)a. You have to keep busy doing something. (2007, COCA)

b. Peggy did not go up to apologise to her great-grandmother; she was too busy doing the work that had been Rosie's routine. (BNC)

(30)a. This weekend Jim was busy working on his roof but he had no idea when he'll have it secured. (1992, WB)

b. My mom could have taught me, but she was so busy working for us. (2002, COCA)

一方、busy in V-ing でもっとも親和性が高いとみられる prepare の頻度は他に比べて高くなっておらず、BNC 以外では 10 番目までに入っていない。Busy in V-ing でよく用いられていた動詞が引き続き busy V-ing でも用いられているのは、make と get を除いてはほとんど上位にない。<sup>9</sup>

Busy in V-ing で多く用いられた prepare が busy V-ing であまり用いられなくなったということではない。COHA からのデータによれば、100 万語あたりの頻度が busy in V-ing では概ね 0.05 (1850 年代に突発的に 0.24) であるが、busy V-ing では 100 万語あたり 0.10~0.20 程度で推移している。

(31) a. busy in preparing

FREQ	0	0	1	1	4	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
PER MIL	0	0	0.07	0.06	0.24	0.06	0.05	0	0.05	0.05	0	0	0	0	0	0	0	0.04	0

b. busy preparing

FREQ	0	0	0	0	0	0	2	2	4	5	4	3	10	3	2	5	1	8	3	1
PER MIL	0	0	0	0	0	0	0.11	0.10	0.19	0.23	0.18	0.12	0.41	0.12	0.08	0.21	0.04	0.32	0.11	0.03



使用頻度としては busy in V-ing よりも若干高くなっている。ただ、他の動詞ほどには高くならなかっただけなのである。おそらく、busy in preparing が表していたことは busy preparing に引き継がれたものの、前置詞 in が脱落したことの影響をあまり受けず、頻度の上昇が大きくならなかったであろう。<sup>10</sup>

上で挙げた do や work、また、be といった busy in V-ing ではあまり用いられなかった動詞が、前置詞 in が脱落したあとで急増した理由を考えたとき、busy in V-ing が表していた意味が重要なポイントになる。前置詞 in の「ある一定の時間の中で・において」という意味に注目されたい。脱落してしまうと、V-ing によって表されている行為は、何かを達成するまでの「ある一定の時間」というようなものを考える必要はなくなってくる。次のような例を考えてみよう：

(32)a. You have to keep busy doing something. (=29a)

b. Peggy did not go up to apologise to her great-grandmother; she was too busy doing the work that had been Rosie's routine. (=29b)

(33)a. This weekend Jim was busy working on his roof but he had no idea when he'll have it secured. (=30a)

b. My mom could have taught me, but she was so busy working for us. (=30b)

(32a) は「何かをして忙しくしている」ということであるから、何かしていることと忙しいことが同時のことであり、ある一定の間何かしている必要はない。(33a) は仕事が終わるまで何時間か働くのだが、その間時間を取られて忙しいというのではなく、「屋根の上で働いていて忙しい」ことを表している。そのほかの例も何かを成し遂げるのに、ある行為を行っていて、それにある程度の時間を取られて忙しいというのではなく、ともかくその場で何かしていること自体が忙しいと解釈できる。

また、be 動詞にかぎられたことではないが、(34a) のような例も、「ある一定の時間」という in の意味合いがなくなった影響で可能になったものであろう。(34a) は親族の様態が好転して嬉しく思うばかりである、という解釈である。「そのことに時間を取られて忙しい」といより、「その場にあつて、嬉しく思うことだけに時間を取られて、他のことはできない」といったようなニュアンスを感じる。

- (34)a. Then my relationship took a turn for the better, and now I'm just busy being blissful.  
(1996, COHA)
- b. Sure, we must embrace that Simon has left the building, but this show needs a dose of reality and everyone is too busy being nice and kind to tell these performers what they need to hear.  
(2011, COCA)

このような状況は laugh (笑う) のような瞬時的な動作を表す動詞も busy V-ing に生起することを許す。

- (35) She heard MacDermot, but Cella couldn't answer her. She was too busy laughing and trying to figure out who that guy was.  
(2012, COCA)

相手のことがわからず、ただ笑ってごまかすしかなく、必死に思い出そうとしていると解釈することができる。

このように、前置詞 in が脱落して「ある一定の期間」という意味合いがなくなったことで、その場で何かしているということを表す様々な動作動詞が可能になり、また、その場の状況にあつてそのほか何もできない、といったニュアンスでは瞬間動詞、状態動詞なども可能になってきている、といえる。

このことを踏まえれば、busy in V-ing でも busy V-ing でも多く観察される make のような動詞があることも説明ができる。上で、prepare について、用いられなくなったのではなく、ほかの動詞のほうがより多く用いられるようになったために、相対的に頻度が低いように見えるだけであることを述べた。同じように、make についても、busy in making として用いられていた時の意味はそのまま busy making に受け継がれていると思われる。しかしながら、make は busy making の形式でも非常に多く用いられている。これは、prepare と違って、make が表す、例えば、「何かを作る」という行為が、用いられる場面によって、(36a) のように、ものが完成するまでの間とも、(36b) のように、ものを作っているその場とも解釈することができるためであろう。

- (36)a. I was too busy making the secret night dinner for the secret night husband. (2003, COHA)
- b. M looks over at husband Ben, who is busy making pancakes, reading from a recipe.

「ある一定の時間の中で」を意味する前置詞 in が脱落したことの影響で、(36b) のような意味で busy making を用いることができるようになった分、それだけ、make は頻度が高くなったのであろう。これに対し、準備をしているといえ、どうしてもある程度時間がかかることをイメージするため、prepare は、in が脱落した後の busy V-ing ではあまり頻度を高めることはなかったのだと思われる。

使役動詞としての make であっても、行為の完了までの一定の時間とも、その場の行為ともとれる。

- (37)a. These words were addressed to a pale, quiet-looking person, who sat opposite, and was busy in making a wretched, shaved poodle sit on his hind legs in a chair, by his master's side, and hold a short clay pipe in his mouth (=26a)
- b. For builders are busy making his official Downing Street residence safe from terrorist attack. (BNC)

次に、try がもっとも多く busy V-ing で用いられるようになったことについて考えてみる。よく知られているように、'try to do' はあることを達成するためにいろいろと手を尽くす意味合いが感じられる。

- (38) Taro tried to pass the entrance examination.

合格できたかどうかは別として、その目的に向けていろいろなことをしている。目的に到達するまでの時間の幅がある。(39) で busy V-ing にあっても、取り除く、思い出すまでのある一定時間あれこれとして時間を取られているといってもよいであろう。

- (39) a. Others were busy trying to remove the wheel so they could rig it with a spare. (COCA)
- b. Meanwhile her nieces and nephew were busy trying to figure out who Alan's client was. (COCA)

(39) に見られるような *busy trying* の例は、その場の行為による忙しさよりも、*busy in V-ing* に近い解釈になるように思われる。前置詞 *in* が脱落し始めたところから増加していることもあり、*busy in V-ing* が消失していくことの補充として広まった可能性を捨てることはできない。*Busy trying* がその場で取り組んでいることを表すことも、*in* 脱落の影響としてももちろん可能である。

(40) Mr Chatichai Choonhavan, Thailand's prime minister, is busy trying to hold his unstable coalition together. (COCA)

*Try* に後続する不定詞には様々な動詞が可能であろうし、行為の達成を意味するものばかりではなく、さまざまな動詞を取ることができる。*Busy V-ing* という表現形式で「一定期間にわたる行為に時間を取られる」ことも、「その場の忙しさ」も表すことができることから、もっとも頻度を高くしたと考えられる。

前置詞 *in* が脱落して、*busy V-ing* が一般的になってくるにしたがって、*V-ing* に生じ得る表現がさらに多様になってきている。Taylor (2012) はインターネットからの用例として、*V-ing* に活動ととれないような動詞が生じ始めていることを指摘している。

(41)a. Pick a day and if I'm not busy resting, relaxing, or taking it easy, we can go fishing.  
b. Simon is too busy liking Kellie. He'll be in tears when she gets voted off. (Taylor (2012: 255))

自らの意志で行う行為ではないので、時間を取られて忙しいということとは相容れないような動詞である。これらも「ある一定の時間」休息をとったり、好きであったりするのではなく、その状況では休息を取るほかない、好きであるしかない、ということを考えれば、*in* の脱落で「その場で」の解釈が可能になったことと結びつけられるかもしれない。

自分の意志ではないことという点では受身形が少なからず *busy V-ing* に生じていることも挙げられる。BNC では *busy being* の 5 例中 2 例が受身形であった。

(42)a. Karen was too busy being interviewed and getting even more famous and rich.

(1994, COCA)

- b. Fru Miller, seated in the front row, was too busy being pleased at this opportunity to provide her guests with free, unexpected entertainment to think of much else. (BNC)

最後に、busy V-ing の使用頻度が busy in V-ing に比べて高くなったさらなる現象をあげる。前置詞 in が脱落し、その場の行為がすなわち忙しい状態であることを示す用例の増加は、現在形での busy V-ing の急激な増加に現れている。Busy (in) V-ing に先行する be 動詞を現在形と過去形にし、その割合を示す。

(43) COHA による現在形と過去形

am busy in V-ing	0	Am busy V-ing	5
are busy in V-ing	12	are busy V-ing	95
is busy in V-ing	4	is busy V-ing	118
現在形	16 (16.0%)		218 (26.2%)
was busy in V-ing	55	was busy V-ing	422
were busy in V-ing	43	were busy V-ing	198
過去形	98 (84.0%)		620 (74.8%)

全体の割合として 10%近く、現在形の使用割合が高くなっていることがわかる。“I'm busy working now.” のような例では、発話時(現在)に働いているという行為で忙しい(他のことに手が回らない)ことを意味していて、現在形でしか表せない。Busy in V-ing では、「あることの達成までの一定の時間」という制約があるために、その行為が完結するまでどれくらいの時間かがわかる過去形との相性がよかった。現在形でこそ伝えられる意味合いが生まれたことで用例数も増えたと考えられる。

さらに、busy V-ing が一時的な、その場での行為による忙しさになったことで、be 動詞だけでなく、keep busy V-ing でその状態を維持することや、get busy V-ing でその状態になるといったことを表す表現が増加したことも、busy V-ing の増加をすすめた要因であろう。

- (44)a. ... but the prison horse is kept busy carrying hay.

(BNC)

b. Optical telescopes would get busy trying to detect planets around the target star.<sup>11</sup> (COCA)

前置詞 in の脱落は、busy in V-ing にかかっていた「ある一定の時間」という意味合いを取り除くことになった。この影響で、それまで busy in V-ing と相性がよくなかった、その場での動作、瞬間的な行為、状態を意味する動詞が busy V-ing に生起するようになった。表現の意味も広がり、それをするので精一杯、それしかできない、といったことも表せるようになった。結果、busy V-ing は busy in V-ing に比べ、使用頻度が格段に上昇することになったのであろう。

## 5. おわりに

後期近代英語の時代に見られた busy in V-ing は、前置詞 in の音声的な弱化の流れと、V-ing と busy との関係において、in の有無があまり問題とならない状況があったことから、次第に in そのものが脱落していくことになったと考えてきた。前置詞 in が脱落したことは、busy in V-ing にかかっていた、ある程度の意味制約「ある一定の時間の行為（準備）」が外れたことを意味し、busy (in) V-ing が「一時的なその場の行為で忙しい状態である」ことや「そのことをするのに精一杯・するほかない」といった解釈にも使えるよう広がってきた。このことにより、様々な動作の意味を表す動詞の生起が可能になっただけでなく、状態動詞にも拡大されていった。また、現在形での使用や、be 動詞以外の動詞との共起も増加してきたことが、busy V-ing という表現形式が、単に busy in V-ing の置き換えでなく、より多く用いられることになった要因であろう。

古い英語では前置詞を取っていたが、現代英語では V-ing の前では前置詞が脱落したとみなされているのは busy ばかりではなく、spend TIME, have (no) difficulty/difficulties といった述語や、slow, late, happy などの形容詞もよくしられている。ここで考えた in の脱落の要因が、すべてに共通するものといえるのかどうか、脱落の時期が異なるようであるのだが、その時期が前後した理由はなにか。進行形や go V-ing などとの関連はいかなるものか。今後、より広い事象を関連づけて考察をすすめていかねばならない。

注

1. The Corpus of Late Modern English Texts, version 3.0 (CLMET3.0)はLeuven大学のDe Smetらが中心となって構築した近代イギリス英語のコーパスである。1710-1780年の88作品(約1000万語)、1780-1850年の99作品(約1130万語)、1850-1920年の146作品(約1260万語)からなり、各時代でおおよその規模を揃えてあり、時代毎の変化の様子を知るには質・量ともにきわめて有用な資料である。また、COHAは1800年から2009年までのアメリカ英語およそ4億語のコーパスで、語句の使用頻度の流れを知ることができる。

2. 末松・田島(1998)が用いたThe Modern English Collectionは、<http://etext.lib.virginia.edu/modeng.browse.html>から、Public Domain Modern English Searchは、<http://www.hti.umich.edu/english/pd-modeng>から、それぞれアクセスすることができる。いずれも後期近代英語の文献を含む大規模コーパスである。

3. 福田(2008)は busy (in) V-ing を含むテキスト数、サイズ割合という形で対比している。次はサイズ割合の当該箇所である。純粋なデータ数の対比ではないが、1800年を境に頻度の逆転が起きている点の確認はできる。

	1650-1699	1700-1749	1750-1799	1800-1849	1850-1899
busy in doing	20	57	61	276	404
busy doing	1	6	13	369	1657

(福田(2008:32)より)

4. 実際には、busy と (in) V-ing の間に副詞的な要素が介在する例もあり、実際の数値はもう少し増える。以下の検索においても、原則 busy (in) V-ing という、busy と (in) V-ing の間に何も他の要素を挟まない連鎖でのデータ数である。

5. 検出された例の中には、次のように a が in を表していることを ( ) に示しているものがある。V-ing の前の a が in であることがわかる。

(i) Nannie has been busy (a-) ironing this evening." (i. e., at her ironing.) — Eliot. We sometimes find it omitted before gerunds: — "And the miser bees are busy (a-) hoarding honey." — (i. e., in hoarding.) — Aldrich. Summing up, I maintain that ... (1902)

6. これが正しいとすると、busy と in の間に副詞的要素が挟まれば、in の脱落が遅れるということが予測される。しかしながら、CLEMT3.0やCOHA見る限りにおいては、busy と V-ing に介

在する要素がない場合よりも遅くまで in が残るとはいえない。

- (i) So saying, she walked out of the room, holding on a little by the wall as she went, and found Mina very busy in the kitchen putting the plates, queer-handled knives, and two-pronged forks on a tray.

(1885: CLEMT3.0)

したがって、あくまで “busy in” という連鎖においては脱落しやすい環境であったとしておくほかはない。

末松・田島 (1999:18) は、現代英語において busy in V-ing の例が 1 例見つかったが、busy と V-ing の間に介在要素があり、前置詞 in は両者の関係が曖昧になることを避けるため、構造上、意味上の理由から用いられているとしている。

- (i) He was busy, he said, in having someone submit to a monkey-gland operation.

7. 動的文法理論については Kajita (1977) 以降、多くの研究がなされている。

8. Poutsma (1929) は spend や waste といった動詞に後続する V-ing について、前置詞が脱落するのは時間を表す目的語があるときにだけ生じると観察している。

9. 使用頻度の変動を知る上で重要な、prepare, work, do, make, be については、APPENDIX に Google Books N-gram Viewer からのグラフを載せた。Google Books N-gram Viewer ( <https://books.google.com/ngrams/> ) は、2004 年以来 1500 万冊を超える書籍をデジタル化してきた Google が、そのサブセットとなる 520 万冊の書籍、およそ 5000 億語をコーパス化したものである。資料の厳密なチェックはできないものの、複数の言語表現形式の使用頻度がどのように変遷してきたかを大まかに知るには十分活用できるものと思われる。これらの動詞が busy in V-ing と busy V-ing でどのくらいの頻度の差で用いられてきているかを概観した。

10. 興味深いことに、prepare をはじめ write や arrange といった動詞が進行形の be busily V-ing という進行形の表現形式に多く現れている。

- (i) write (26), prepare (25), work (17), make, arrange, pack, try, sew, put, move, knit  
(ii) On this cold November night she is busily preparing food for the six mujahidin, ... (1985, COHA)  
(iii) I was in such a tumult of rage and mortification that not until I reached the landing on the banks of Cahokia Creek, where the boats were tied and the men busily making ready for the departure, did I bethink me that I had left the house without a word of adieus or thanks to my host for his courtesy.

二番目に多く検出される動詞が prepare であることや、用意、準備に関わる make の表現 (make



preparations, make ready for) が上位にあることは、busy in V-ing で好んで用いられた種類の動詞に一致する。この進行形に引き継がれた分、busy V-ing での頻度が上がらないのか、その関係についてはわかっていない。

11. (38b)の例は主語が ‘optical telescopes’ という無生物主語である。比喩的な表現であろうが、人間以外にも使える表現になっていくのかもしれない。

#### 参考文献

- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』東京：開拓社
- 荒木一雄・宇賀治正朋. 1984. 『英語史 III A』東京：大修館
- De Smet, Hendrik. 2013. *Spreading Patterns: Diffusional Change in the English System of Complementation*. Oxford: Oxford University Press.
- De Smet, Hendrik. Forthcoming. ‘Integrated particle Clauses: From Adverbial to Complement,’ *Word*.
- 江川泰一郎. 2008<sup>3</sup>. 『英文法解説』東京：金子書房
- 大室剛志. 1988. 「英語における半動名詞構文について」『言語文化論集』10-1, 45-65. 名古屋大学総合言語センター.
- Fukuchi, Hajime. 1976. “Quasi Complements and Active-Passive Relations,” *Studies in English Literature 1976*, 105-126.
- 福田薫. 2008. 「近現代英語における前置詞なし V-ing 構文の頻度調査と分析」『北海道英語英文学』27-39.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1909-49. *A Modern English Grammar*. Part IV. London: George Allen and Unwin.
- Kajita, Masaru 1977. “Towards a Dynamic Model of Syntax,” *SEL* 5, 44-76.
- 小西友七. 1989. 『英語基本形容詞・副詞辞典』東京：研究社
- 小野捷・伊藤弘之. 2009. 『近代英語の発達』東京：英潮社フェニックス
- Poutsma, Hendrik. 1929. *A Grammar of Late Modern English*. Groningen: P. Noordhoff.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive*

- Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rudanko, Juhani. 2006. "The *in-ing* Construction in British English, 1800-2000," *Nineteenth-Century English: Stability and Change*. ed. Merja Kytö, Mats Rydén and Erik Smitterberg. Cambridge: Cambridge University Press
- Senfuku, Keiko. 2005. "A Study of the *busy V+ing* Construction," Graduated Thesis at Tokyo Gakugei University.
- Sinclair, John. 2011<sup>3</sup>. *Collins Cobuild English Grammar*, London: HarperCollins Publishers
- 末松信子・田島松二. 1998. 「19世紀英語における‘busy (in/with) doing’構文」『言語科学』34, 15-20. 九州大学言語文化部.
- Swan, Michael. 2005<sup>3</sup>. *Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. 2012. *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.

コーパス

- A Corpus of Late Modern English Texts 3.0* (CLMET3.0)
- A Corpus of Late Modern English Texts extended version* (CLMETEV)
- A corpus of English Novels* (CEN)
- Corpus of Historical American English*, Brigham Young University. (COHA)
- Google Books Ngram Viewer*
- The British National Corpus* (BNC), World Edition, the Humanities Computing Unit of Oxford University.
- The Corpus of Contemporary American English*, Brigham Young University. (COCA)
- The Oxford English Dictionary* 2<sup>nd</sup> edition on CD-ROM (OED)
- The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE)
- Collins *Wordbanks Online*, 小学館ネットワークコーパス

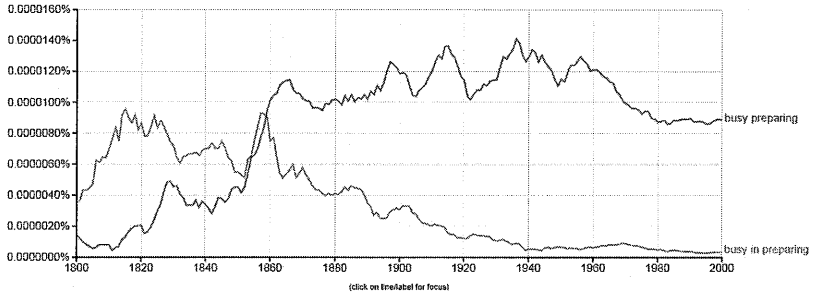
(東京学芸大学 講師)

## APPENDIX

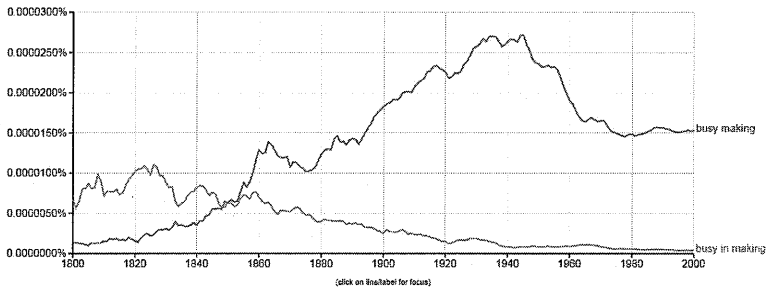
Google Books N-gram Viewer による busy in V-ing と busy V-ing の使用頻度の変遷について

① busy in V-ing で COHA, CLMET3.0 両方で多く見られた動詞: prepare と make

### (1) prepare

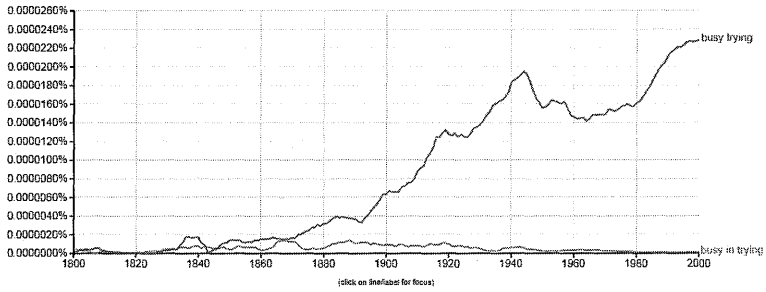


### (2) make

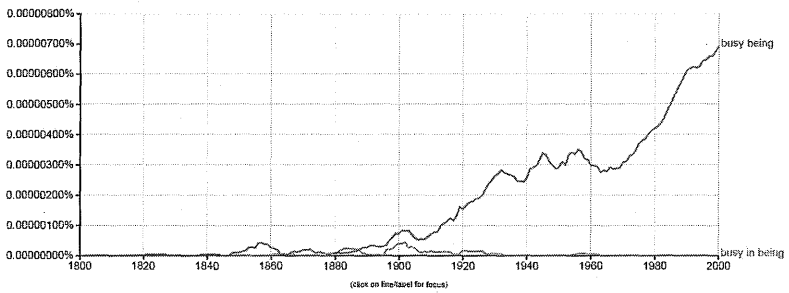


② busy in V-ing ではあまり用いられていなかった動詞 : try, do と work

(3)try



(4)do



(5)work

